

# マイヅルテンナンショウ（サトイモ科），ハイハマボッサ（サクラソウ科），ミズニラ（ミズニラ科）の富山県内における新産地

著者	梅林 正芳，加藤 真，太田 道人，本谷 二三夫，中野 真理子，木下 栄一郎
著者別表示	Umebayashi Masayoshi, Kato Makoto, Ohta Michihito, Mototani Fumio, Nakano Mariko, Kinoshita Eiichiro
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	54
号	1
ページ	71-73
発行年	2006-10-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/00050049">http://hdl.handle.net/2297/00050049</a>

梅林正芳<sup>1</sup>・加藤 真<sup>2</sup>・太田道人<sup>3</sup>・本谷二三夫<sup>4</sup>・中野真理子<sup>5</sup>・木下栄一郎<sup>5</sup>：マイヅルテンナンショウ（サトイモ科）、ハイハマボッサ（サクラソウ科）、ミズニラ（ミズニラ科）の富山県内における新産地

Masayoshi Umebayashi, Makoto Kato, Michihito Ohta, Fumio Mototani, Mariko Nakano and Eiichiro Kinoshita : New localities of *Arisaema heterophyllum* (Araceae), *Samolus parviflorus* (Primulaceae) and *Isoetes japonica* (Isoetaceae) in Toyama Prefecture

富山県内でマイヅルテンナンショウ *Arisaema heterophyllum* Blume (Fig. 1), ハイハマボッサ *Samolus parviflorus* Rafin. (Fig. 2), ミズニラ *Isoetes japonica* A. Br. (Fig. 3), の3種の生育を確認したので報告する。

マイヅルテンナンショウは、河川敷や草地の開発により九州中部以外では絶滅に瀕しており、環境省レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類に指定されている（環境省野生生物課 2000）。日本国内の分布地はとびとびであり、秋田、茨城、栃木、岡山、山口、熊本、大分、宮崎、鹿児島 の9県で生育が確認されている（矢原他 2003）。ハイハマボッサは、日陰でやや湿った環境に生育し海岸付近の湿地や山地の池沼のほりにも生育する（矢原他 2003）。生育地の開発や遷移の進行で減少しており、絶滅危惧Ⅱ類に指定されている（環境省野生生物課 2000）。ハイハマボッサは北海道南部と本州の日本海側に分布し、北海道、青森、宮城、秋田、山形、千葉、新潟、長野、山口の1道8県で生育が確認されている（矢原他 2003）。ミズニラは、本州、四国、九州に分布するが、水質汚濁や耕地整備などによって生育地が激減しており、絶滅危惧Ⅱ類に指定されている（環境省野生生物課 2000）。湖沼、ため池、水田などに生育する水生または湿地生のシダ植物で、ため池のほりなど干上がる場所に生育していることが多い（矢原他 2003）。

2002年5月に富山市のスギ植林内の池の周囲でマイヅルテンナンショウ、ハイハマボッサ、ミズニラの生育を確認した。マイヅルテンナンショウ、ハイハマボッサは富山県内初である。ミズニラは平地の停水湿地にごくまれに生育するとされ（大田他 1983）、富山市や小杉町で生育が確認されていた（太田・坂井 1997）が、現在では氷見市に1カ所の生育地が確認されているのみである（富山県自然保護課 2002）。

池の大きさは最長径46 m (E 80°)、幅35 m (E 17°)である。東側の小さな沢から池に水が流入しているが流出はない。雨が少ないと沢は涸れるため、池の水位は降水量によって大きく変動し、時に池全体が干上が



Fig. 1. A photograph of *Arisaema heterophyllum* taken at May, 2002.



Fig. 2. A photograph of *Samolus parviflorus* taken at May, 2002.



Fig. 3. A photograph of *Isoetes japonica* taken at June, 2005.

ることもある。2002年5月は池には水があり、水中にはシヤジクモ、スプタの生育が確認され、モリアオガエル、クロサンショウウオも見られた。池の南岸とスギ林との間には数m～10数m程度の開けた草地があり、池の北側の一部を除く汀線はネコヤナギ、オオタチヤナギの低木林となっている。ヤナギ類の低木林で覆われていない汀線付近にはシロバナカモメヅル、ミゾソバ、イシミカワなどが生育していた。2005年6月の調査時には池は干上がっており、汀線の内側にはカンガレイ、フトイ、ヒシが生育し、多数のモリアオガエルの死体がみられた。池の周囲の草地には、ミゾソバ、ノダイオウ、ツボスミレ、アズマナルコ、キツリフネ、ツリフネソウ、コジュズスゲ、セリ、アオミズ、アキノウナギツカミ、イシミカワ、エゾシロネ、オオバギボウシ、ヌマトラノオ、マイヅルテンナンショウ、マムシグサ、ミズタマソウ、ドクダミ、イノコズチ、イヌガラシ、キツネノボタン、ミゾカクシ、ツルウメモドキ、ノイバラ、ヒメコウゾ、フジ、ヤマグワ、シロバナカモメヅル、カナムグラ、サルナシ、マタタビなどが生育していた。

マイヅルテンナンショウは主に南側汀線から数m陸側の草地から林縁部にかけて生育していた。ハイハマボスの群落は池の南側のヤナギ林下部、ミズニラの群落は池の東側の水際付近でみられた。ハイハマボスとミズニラの群落は池の水位が上昇すると水没し、降水が少ないと干上がる地点にあった。

ハイハマボスは2005年10月に南砺市でも生育を確認した。この場所ではハイハマボスは落葉広葉樹の林に取り囲まれた池の湖岸近くの浅瀬にある岩の周囲や砂泥が堆積した洲の水際など生育していた。生育環境は富山市の生育地同様、水位の変動に伴って容易に水没する場所である。

本報告の中には絶滅危惧種が含まれ、それらの盗掘を避けるために詳しい地名を省いた。これら3種の生育する草地または湿地は、低いレベルの除草や周囲の林の除伐などの管理が継続的に行われて維持されている場所である。池の改修、転用などが行われると生育地が直接破壊されることは言うまでもないが、逆に管理が途絶えることによって草地環境の継続性が失われ群落の消失につながる恐れもある。

#### 引用文献

- 大田弘・小路登一・長井真隆. 1983. 富山県植物誌. 430 pp. 廣文堂. 富山.  
太田道人・坂井奈緒子. 1997. 富山からいなくなった水草. 富山市科学文化センター. とやまと自然.  
環境省野生生物課(編). 2000. 改訂・日本の絶滅の恐れがある野生生物—レッドデータブック—8 植物 I (維

管束植物). 660 pp. 自然環境研究センター, 東京.  
富山県自然保護課. 2002. 富山県の絶滅のおそれのある野生生物 (レッドデータブックとやま). 富山県.  
矢原徹一 (監修). 2003. ヤマケイ情報箱レッドデータプランツ, 720 pp. 山と溪谷社, 東京.

(<sup>1</sup>〒920-1192 金沢市角間町 金沢大学大学院自然科学研究科; <sup>2</sup>〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町 京都大学大学院人間・環境学研究科; <sup>3</sup>〒939-8084 富山市西中野町 富山市科学文化センター; <sup>4</sup>〒939-1861 南砺市城端本谷機工; <sup>5</sup>〒920-1192 金沢市角間町 金沢大学自然計測応用研究センター <sup>1</sup>Division of Life Sciences, Graduate School of Natural Science and Technology, Kanazawa University, Kakuma, Kanazawa 920-1192, Japan; <sup>2</sup>Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University, Yoshida-Nihonmatu-cho, Sakyo, Kyoto 606-8501, Japan; <sup>3</sup>Toyama Science Museum, Nishinakano, Toyama 939-8084, Japan; <sup>4</sup>Mototani Kiko Inc., Jyohana, Nanto 939-1861, Japan; <sup>5</sup>Botanical Garden, Institute of Nature and Environmental Technology, Kanazawa University, Kanazawa 920-1192, Japan)